

## 『法華経』と芸能の結びつき

— 聖徳太子伝・琵琶法師・延年 —  
(要旨)

石井 公成\*

『法華経』は、もともと芸能的な性格を持っていた。辛嶋静志が指摘するように、譬喩品の火宅の譬喩では、jñāna（智慧）と yāna（乗り物）が中期インド語ではともに jāna であることを利用した言葉遊びが用いられている。

中国では、初唐には盲人が琵琶を弾きつつ『法華経』を読誦していた例がある。新羅でも同時期に琵琶居士と呼ばれる仏教系芸能者が存在していたため、彼らも『法華経』を琵琶の伴奏で読誦したことが想像される。

隋から唐の初期にかけて成立したと思われる仏教色が強い笑話集、『啓顔録』には、『法華経』の文句を用いた駄洒落が見えており、広く親しまれていた『法華経』は、冗談の素材でもあったことが知られる。

日本でも、『法華経』は早くから受容されており、『日本書紀』では蘇我氏と物部氏の合戦場面において、『法華経』の文句が利用されているため、寺院の縁起譚の一部として戦記を含む太子伝が物語られていた可能性があり、後には琵琶法師が関与した可能性もある。

受容が進むにつれ、日本化も進んでいった。平安初期の『東大寺諷誦文稿』が、「春細雨降時<sub>ル</sub>如万草木生長<sub>ル</sub> 下平等一味<sub>ル</sub>法細雨 除滅无邊乃災患」と述べているのは、雨季になって激しく降るインドの雨を日本の柔らかな春雨として受容したことを示しており、また衆生の機根を論じた薬草喩品の喩えが除災の呪文のように受け止めら

れていたことが分かる。

『啓顔録』同様、いやそれ以上に『法華経』を冗談のネタとして使うことが盛んであって、恋の歌でも盛んに用いられた。小野小町への返歌とされる僧正遍昭の「世をそむく苔の衣はたゞ一重貸さねば疎しいざ二人寝ん」はその代表例であり、『法華経』の複数の個所の文句を用いている。

注目されるのは、永享12年（1440）9月の『管弦講并延年日記』「宝塔涌出事」によれば、興福寺の延年において、『法華経』に基づく多宝塔出現のページントが展開され、それが「鬼畜」を鎮撫する祝言となっていることだ。つまり、僧侶が釈尊に扮して登場し、今から一乗を説くため集まるよう告げると、龍神や動物のかぶり物をつけた者たちが多く参集し、彼らに釈尊が、『法華経』が説かれる所には宝塔が出現すると説くと、作り物の宝塔が出現して戸が開く。そこで、大衆説菩薩が、「鬼畜人天、悉く記別に預かり了んぬ」と述べ、舞楽が始まる。

「一切衆生」と言わず「鬼畜」を最初に出しているのは、すべてのものが将来成仏するという預言を与えることにより、害をなす邪鬼・悪獣を鎮撫しようとするものと言えよう。威嚇によって邪鬼を追い出す中国の追儼と違い、延喜式の追儼では慰撫したうえで出ていくよう求めていたが、寺院での延年では、一切成仏の授記を与えて邪悪な存在を鎮撫しようとしたのであって、『法華経』は祝言の役割を果たすに至ったのである。

\* 駒澤大学教授